貫く信念 大きな足跡

第65回（2021年度）沖縄タイムス賞は、正賞3件（1企業・2個人）と感謝状2件（1個人・全ての医療従事者）に決定しました。受賞者の功績とこれまで尽力してこられた取り組みへの思いなどを紹介します。

受賞者一覧

▽産業部門＝オキコ株式会社「戦後沖縄の食品産業振興に尽くした功績」
▽文化部門＝祝嶺恭子氏「首里織の発展・継承に尽くした功績」
▽社会活動部門＝長位鈴子氏「障がい者の人権擁護に貢献」
▽感謝状＝川平朝清氏「沖縄の放送事業の発展に貢献」
▽感謝状＝全ての医療従事者「新型コロナウイルス感染症に対し、強い使命感を持って職務に当たってきたことへの感謝」

コロナ禍 最前線で奮闘

全ての医療従事者

感謝状

新型コロナウイルスの陽性者が県内で初めて確認された2020年2月14日以降、医療従事者の皆さんは未知の感染症に最前線で立ち向かい続けている。

昨年春は、感染から身を守るガウンや医療用マスクなど防護具が不足。使い回しや手作りでしのぎ、検査をするにも感染リスクにさらされた。治療法も確立せず、医師の一人は当時「経過を見守るしかできず、何もできない不安とストレスが大きい」と吐露した。

偏見もまた、医療従事者を追い詰めた。保育園から子どもの預かりを拒まれたり、高齢の親のデイサービス利用を断られたりする事例が発生。苦肉の策で病院内で臨時に職員の子どもを預かる病院もあった。受診控えなどで経営悪化に陥る民間病院も相次いだ。

初確認から1年余りがたった今、防護具不足や偏見などは一定解消した。だが流行が訪れるたびに規模は大きくなり、医療逼迫の度合いは深まる。全国でかつて経験したことのない流行の波に直面した5～6月は連日、一般・コロナ病床の占有率が9割を上回り、官民の病院が限界を超えて患者を受け入れた。

ワクチン接種は進みつつあるが、なお感染の収束が見通せない日々に医療現場の疲労は色濃い。沖縄の感染者の死亡率は全国や東京に比べて低い。医師や看護師に加え臨床検査技師、薬剤師、保健師、事務、清掃員などさまざまな職種の皆さんが、今この瞬間も、県民の命や生活を守るため奮闘している。